OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『トランスモダンの作法』のころ : 1980年代の鷲田清一
Author(s)	中岡, 成文
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23304
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『トランスモダンの作法』のころ
──1980 年代の鷲田清一

中岡成文

私が鷲田清一という哲学者をとくに意識し始めたのは、1983 年夏から翌年春にかけて、お互いの研究留学先のドイツのルール大学（ボーフム）で交流した時期だと思う。私の場合は、竹市明弘先生の強いご勧奨を受けて留学したのだったが、鷲田さんもそうではなかっただろうか。鷲田さんは現象学のヴァルデンフェルス教授（鷲田夫人はたしか「ワルデンさん」と親しく呼んでおられた）、私はヘーゲル哲学研究のペゲラー教授と解釈学のローディ教授のもとで、研究を進めていた。鷲田さんはヴァルデンフェルス氏と馬が合って、現象学の指導を超えて、ちょっとした冒険も一緒に経験されたようだ。私はヘーゲル哲学および解釈学の勉強の傍ら、幸いルール大学に日本学科があるのを利用して、そこの図書室で西田幾多郎全集や田辺元全集を借りて論文を書いたことを思い出す。ドイツに居て近代日本哲学に思索を凝らし、論文をひねり出すのは、奇妙な思いだった。ちなみに、ボーフムにはサッカーのブンデスリーガ（ドイツ 1 部リーグ）のチームがあって、当時だんとつの実力と人気を誇るバイエルン・ミュンヘン、そして日本人としてレギュラーを張っていた奥寺康彦のいるケルン、この 2 チームが来た時だったと思うが、スタジアムに観戦に行った記憶が頭をよぎる。ともあれ、私たちは二人とも 30 代前半、まだ未確定の将来を控えた、活気のある時期ではあった。

しかし、その後鷲田さんは日本に帰られ（当時は関西大学勤務）、私はさらに 1 年ボーフムに滞在したあと、福岡女子大学に帰任したので、研究上のお付き合いが密になるのは、これから述べるセゾングループ史編纂にからむ研究会を通してであったと記憶している。

さて、この「セゾン」の研究会だが、私にとってはずいぶん鷹揚で変わった研究会だった。研究会のいわば成果報告書として出版された『トランスモダンの作法』のあとがき（今村仁司さん執筆）によると、セゾングループの総帥堤清二氏（小説家としても著名）が、グループの節目の時期に、ありきたりの社史を作る代わりに、「現代社会と文化を分析し理解するために貢献しうる書物を記念事業にふさわしい形」で作ろうとされたらしい。セゾンの委託を受けて今村さんが

中心となり、鷲田さんに声をかけ、鷲田さんが私を誘ってくれ、そのほかに野家啓一さんと篠原資明さんが加わって、5 人が研究メンバーとなって、1989 年から 92 年まで、毎月一度の研究会をもった。事務局メンバーに、まだ一般には知られていなかった後年の直木賞作家·車谷長吉（本名嘉彦）氏がおられたことは、文学好きの注意を引く事実かもしれない。

ものすごく大ざっぱにいえば、今村さんが経済学や社会哲学、鷲田さんが現象学、野家さんが科学哲学と歴史哲学、篠原さんが美学、私がヘーゲル哲学という専門に分かれるが、1942 年生まれでお兄さん格の今村さんを除く 4 人はほとんど同じ年恰好であり、打ち解けて議論できた。ただ、時あたかもソ連・東欧の旧社会主義圏が崩壊し、ベルリンの壁が倒されて政治的熱気も漂っていたころで、「自由」の概念についてやや懐疑的な発言を私が研究会でしたためか、ある晩の飲み会のとき、今村さんが突然きつい口調で明らかに私にあてつけながら自由を擁護する議論を始め、私も他のメンバーも戸惑ったことを思い出す。ヘーゲルの「否定性」とか、「持ちこたえる」ことを通しての自己鍛錬、超越とかを語りたがる私――それは今でもそうなのだが――に、違和感をもたれていたのだろう。そんなこともあれば、ある晴れやかな夏に、八ヶ岳山麓の施設で合宿をし、堤清二氏を迎えて私たちの発表を聞いてもらったこともあった。バーで酒を啜りながら、堤さんがふいに詩人大岡信の批判を切り出したのには、驚きもし、興味深くも感じた。

この研究会の成果として残された『トランスモダンの作法』（責任編集・今村仁司、リブロポート、1992 年）刊行の年、鷲田さんが阪大の文学部倫理学研究室に移ってこられることになり、その時点ではまだ旧教養部に在籍していた私も 2 年後倫理学研究室に分属（移籍）して、1998 年の臨床哲学発足につながる。またその後、一種野人の力強さを感じさせた今村さんは残念なことに故人となるなど、さまざまな変化があった（事務局の車谷さんが小説家として名をあげたのは前述のとおり）。野家さんは東北大学の副学長として、鷲田さんと同じ大学運営の立場に身を置かれるようになり、篠原さんは当時勤務していた東京芸大から京都大学に帰ってこられた。車谷さんと共に研究会運営と出版を支えてくださった秋山晃男さんには、拙著『私と出会うための西田幾多郎』公刊に際して、またお世話になった。しかし、私は昔話をしたいわけではない。どういうわけかあまり反響を呼ばなかった『トランスモダンの作法』を今日読み返すにつけ、野原の小道を歩きながら振り撒き、置き去りにしてしまった（と少なくとも私は感じる）気に入りの小物を再発見するので、小論では、40 歳前後の鷲田さんの思想の一側面を点描することも狙って、この本のトピックのいくつかを紹介してみたい。

『トランスモダンの作法』はかなりがっちりした構成をとっている。「近代性の構造」が機械、方法、交通、労働、時間の 5 つの柱のもとに分析され、5 人のメンバーがすべての柱について自分の論稿を提出している。3 年間毎月全員が顔を合わせて遠慮のない議論を重ねた結果として、各論者が引っ張ってくる思想家、作品、テーマ、トピックその他がきめ細かくクロスオーバーして、ありがちな「論集」を超える一体性をつくり出している。今村さんの「序」によれば、本書には、「近代性の構造を反復しつつ再構成するが、同時にその反復の中で細部の変容を試みる」という狙いがある。ここでは、第 1 部「機械」と第 5 部「時間」から鷲田さんと中岡の論点を適

宜取出して分析を試みる（以下、カッコの中の数字は上掲の書物からの引用頁を示す）。

さて、第1部に置かれた「機械」というテーマであるが、鷲田さんは「身体の機械化」の観点から「自動装置」と題した文章を寄せ、中岡は「精神の機械化」の観点から「精神という実験」について論じている。

二人がともにこの第1部で引き合いに出す哲学者･思想家は、デカルトとマクルーハンである。鷲田さんは､デカルトが人間の身体を「自動機械」とみなし､その延長線上に､身体の「訓育」（ドレッサージュ）を狙うラ・メトリの『人間機械論』が生まれ、後者が「思考は有機組織を持った物質と決して相容れないのではなく、かかる物質の一属性（中略）と思われるくらいである」と指摘したことが、現代の神経生理学や人工知能の研究につながっていく様子を描く。そして、マクルーハンが活字からエレクトロニクスにいたるあらゆるメディアを「身体能力の拡張」と捉え、人間の世界経験とメディアとの関係が相互外在的ではなくて、メディアの装備ないし接合によって発生する人間の「感覚」と「その対象世界」の変貌を問題としたことに注意を向ける。マクルーハンのメディア論によれば､「ラジオを聞くこと、印刷されたページを読むことは、われわれ自身の拡張したものを自身のなかに受容することであ」る（47）。メディアは、経験の「転換子」ないし「変形器」として、われわれの身体的存在を変換させる（48）。このような身体とメディアとの接合は、現代ではもはやかつてのように「筋肉モデル」（肉体的な労働過程を機械によって代替するという考え方）では考察できないのであり、むしろ中枢神経のネットワークの内部に身体の諸器官があるという仕方で､「神経系モデル」が必要になってくる（49）。

フーコーのいう生権力を通じて、人間の身体が生産装置の中に組み込まれて､「屍体と化していく」（58-59）というのは鷲田さんらしい表現である。その屍体はしかし、不思議なことに､「あるあやしげな悦楽へと反転」する。フロイトの「不気味なもの」の分析が示唆するように、自らをたえず同一的な自己として形成することが人間となるためには不可欠だが、その形成作業の裏で、そのために「隠蔽＝忘却」せざるをえなかったある「原初的な存在条件」への憧れを、人間は断ち切ることができない。自動人形はそのひそかな二重性､「矛盾した動性」を､「人工的なものの偏愛（身体という自然的な存在の否定）､（中略）無名であることの快感（人格性･人称性･自我性の払拭）」などの形で反映している、というわけだ（以上59）。

このような議論の力強い展開に引きさらわれつつも、私が一つひっかかるのは､「原初的な存在条件」は「自然」に属していたはずなのに、なぜ自動人形では「身体と言う自然的な存在の否定」として現れるのかという点である。しかし、これは、私自身が自然性の神話を逸脱しつつ、どこか自然性につなぎとめられているせいかもしれない。

以上に見られる鷲田さんのマクルーハン理解と中岡のそれは、基本的には相反していないものの、目の付け所はかなり違う。印刷術の発明以来の精神の「機械化」によって、人間の中枢神経には強力な刺激が加えられ続けており､中枢神経を保護するためにはその刺激（テクノストレス）をうまく処理してやることが必要なのだが、中岡が注目するのはこの点である。刺激処理の基本的方法は、刺激を除去する（安静にするなど）か、反対刺激を加える（アルコール、娯楽、ス

ポーツなど）かであるが、どんな反対刺激が有効なのか。マクルーハンは、「苦役」を集中して自己を拡張し、苦しみを中和すること、つまり自分をわざと危機に陥れて自分を救うことが、最大の反対刺激だと指摘している。この逆説的な内向性（ベックなどのいう近代の「再帰性」？）は、マクルーハンのいう「内破」の現象と関係しているだろう。機械時代までの文明が「外破」explosion という形で発展したのに対して、エレクトロニクス時代は「内破」implosion を特性とすると、マクルーハンは考えているのである（以上 63）。

ここでの中岡の議論では明記されていないが、逆説的内向性は、ヘーゲル弁証法のもつ否定性（自己外化を経由しての自己内還帰、デリダの言葉では「自己去勢」）との関連で検討することができる。鷲田さんと同じく、中岡も「不気味なもの」について論じているが、それはハイデガーが『形而上学入門』で解明する人間の「不気味」（ギリシア語で deinos、ドイツ語で unheimlich）な特性に関説してである。ウンハイムリッヒなものは、故郷的（heimlich）なもの、住み慣れた、危なげのないものから、我々を放擲する。しかし、ギリシア悲劇で言われるように、何にもまさって deinos な（不気味な、底知れない）存在は、実は人間自身なのだ。なぜなら、人間は、人間を「制圧」しようとするもろもろの存在者（「デイノス」なもの）にさらされつつ、他方では鍛え上げた技術をふるってこれらのものに対抗する底深い（不気味な）力を有しているからである（以上 65-66）。

以上の比較からだけではわからないかもしれないが、鷲田さんがよく使う「反転」という概念と、中岡の理論的出発点であるヘーゲルの弁証法のキーワードである「矛盾」という言葉は、非常に近接しているように見えて、かなり性格を異にする。ここでは突っ込んで分析できないが、一つだけはっきりしているのは、後者の場合、弁証法的な主体が厳然として存在し、主体が中心となっていることだ。たとえ自己が繰り返し外化されるとしても、繰り返し再び自己に帰ってくる。他者は繰り返し主体に内在化される。ヘーゲルの内在主義として批判されるものだ。その批判に傾聴する気はあるものの、私としては「絶対他者」の言説よりは内在主義のほうが（倫理的アピールとしての役割は別として）理論としてはまっとうではないかと思っている。

第 5 部「時間」において、鷲田さんは「モードの時間――いまの専制」というタイトルで書いている。手元の資料によると、『現代思想』の 1989 年 10 月号に「モード、あるいは身体の風景」と題する論文を寄せたのが、鷲田モード論公表の皮切りである（それまでにも「身体」論は世に問われていた）。それに対して、『トランスモダンの作法』の「あとがき」（今村）に残されている「セゾン」研究会の記録に頼る限り、1990 年 3 月の研究会で鷲田さんは「モダンな顔　近代人の人格概念」という発表をしているが、モードについての発表は（あくまでタイトルを見る限りだが）一度もない。

ともあれ、鷲田モード論のまだ初期に属すると思われる「モードの時間――いまの専制」は、「流行（モード）は、流行るべきものを流行っているものとして、有無を言わせず命じるトートロジカルな形式のことである」という端的で端正な、そう、それ自身スタイリッシュな言明で口火を切っている。「それは、おのれへの従属を、無条件的に命令する」と続く。そしてモードのこの

無条件的な命令を、鷲田さんはジンメルとともに、カントの定言命法のそばに位置させる。この展開も、大向こうから声をかけたくなるくらい、鮮やかである（以上 619）。

これを書いていてしきりに思うのは、近代の「無根拠」性が、『トランスモダンの作法』をいちばん根底で貫くキーワードではないかということだ。5 人の執筆者すべてが無根拠という「事柄」を見据えて思索し、表明し、論じ合っている。しかし、5 人の方向性とスタイルは少しずつ異なる。鷲田さんはこう述べる。モードは、「無根拠であるのに必然的な根拠にもとづくかのようなふりをしなければならないのだ。モードの専制とはまずはシミュラークルの専制のことなのである」（621）。無根拠性へのモードのかかわりは、シミュラークルである以上は、「もてあそぶ行為」であり、「何重もの「ふり」に含まれる狡智」を凝らしてのことである（622）。そう、何重もの「ふり」であり、いつ果てるともない、いや近代においては果ててはならない「戯れ」なのだ。

近代社会は「ステレオタイプ」を発明した。「この「仮構 fiction」としての社会の構造を、モードはそのもっとも基礎的な装置として支えつつ、同時にその仮構性そのものを焙りだし、それと戯れる。次々に世界への新しいセンシビリティを提示し、煽り、激しく流通させては、やがてそれを冷酷に棄却する」（624-625）。短いパッセージを取出しただけとはいえ、鷲田節の真骨頂が読み取れると思う。仮構の近代社会を、仮構として支えつつ戯れ、再生産するモード。何重もの「ふり」。このようなスタイリッシュな文章を読んで、執筆者に面を向け、ではこの文章自体はどのような「ふり」または「戯れ」としてモードや近代という主題にかかわっているのか、要するに鷲田さん個人はモードと「戯れ」ているの否かと質問するならば、あまりにきまじめすぎて、言説の巧緻をぶち壊す野暮と言われても仕方がないだろう。それでも問うてみたい衝動に、私は駆られる。

それは、私がやはりヘーゲルの徒であるせいなのかもしれない。シラーの「遊び」の構想に背を向け、仕事・労働を優先して、何かを積み上げようとしたヘーゲルの。鷲田さんの文章の締めくくりで、「モードの展開には、何ら「弁証法的」な発展はないのである。重要なのは、たえず何かを作っては壊すという身ぶりなのである」と述べられていることに単純にもいら立ち、「すべてのきまじめさ seriousness を愚弄するシミュラークルの専制」（以上 632）にきまじめに憤り、せっかくみんなが機嫌よく遊んでいるゲームを駄目にする者 Spielverderber の役目をあえて買って出ようという、野蛮な思いが心に浮かぶからかもしれない。

さて、その私はといえば、第 5 部「時間」に関しては、「時間の組織化――発明される発明」という一文を寄せている。日本語の「発明」にしても、英語の invention にしても、かつてはむしろ「発見」を意味していたという事実を手がかりに、技術革新や研究開発に見られる近代の「時間の組織化」、「新しさ」のコントロールの問題に迫ろうとしている。「必要は発明の母」と言われるが、近代では、「必要さえも発明される」（642）のである。私はこの前後の数年、デリダを集中的に読んで小さくない影響を受けているが、そのデリダの「他者のインヴェンション」という言葉に導かれた面がある。インヴェンションはつねに、「事物の平穏な配置のうちに無秩序を導入する「非合法さ」を意味している」。それは、「他なる欲望そのものをインヴェントする」結

果、人種主義や排外主義のように、「他者」（「外国人」）を「発明」しつつも、それと関り続けることを拒否し、他者を排除し、「同一なるもの」に再び閉じこもってしまうことにもなる（644-645）。

シミュラークルや無根拠という、鷲田さんが焦点を合わせる概念に、私も無関心ではない。インヴェントする行為は一回的でも、インヴェントされたものは伝達され、置き換えられ、「反復」（デリダの基本用語）されて、その意味ではどこにも「本物」のない「模造品」となる。企業は発明のプロセスをプログラム化し、「偶然的要素を可能な限り管理下におき、リスクを排除」することにより、「同一なるもの」をインヴェントする（646）。ここには、鷲田さんが分析したモードと共通の構造が見て取れる。しかし、それなら、真の他者、「予期できない他なるものを創発せしめ」（647）、その他者と遭遇することは可能なのか。他者とは、近代社会において、もう一つのシミュラークルに過ぎないのではないか。

「発明される発明」についてのこの拙稿は、「正と不正の発明」という副題をもつマッキーの『倫理学』が近代人の無根拠性を逆手に取り、規範の再構築を試みていることを紹介した（648）あと、ニーチェの『善悪の彼岸』を引き合いに出して、結ばれている。近代人は、果てしのない新奇性への欲情に駆られ、さまざまな道徳・信条・芸術の好み・宗教を次々に試着し（モード！）、前代未聞の「カーニヴァル」を催す。さまざまなモードに対する「精神の哄笑」がそこに弾ける。このように、いわばメタ次元に立って世界史を俯瞰し、パロディー化し、それを享受することが、唯一残された「発明」の形態だ（649）――これをニーチェのメッセージと受けとめただけで、私は自分自身の答えは提示していない。今もそれは提示に至らないと思うが、臨床哲学の経験を経て、俯瞰（鳥の目）よりは地上を歩く、あるいは這うものの目になって見たいという気持ちがより強くなっていることは確かだ。

鷲田清一論と称するには足らぬ、あまりに腰の軽い回顧と論述に終ってしまったが、より本格的なものへの一つの呼び水になることを期待して筆をおく。

（なかおかなりふみ　臨床哲学・教授）

At the time of "*Transmodern Manners*" — Kiyokazu WASHIDA in the 1980s

Narifumi NAKAOKA

In commemoration of retirement of Professor Emeritus Kiyokazu WASHIDA, this essay tries to sketch some aspects of his life and philosophical activities in the 1980s, specifically his ideas reflected in his essays published in the 1992 book "*Transmodern Manners*," the responsible editor of which was the late Hitoshi IMAMURA, and whose coauthors included, besides WASHIDA and IMAMURA, the then young philosophers Keiichi NOE, Motoaki SHINOHARA, and me.

At first, I describe how I had come to associate with WASHIDA in Germany, as we both stayed as guest researchers at the institute of philosophy of the Ruhr-University Bochum. In 1989, IMAMURA assembled the above philosophers to form a team for the aim of clarifying what modernity was. The result of our two-day meetings every month was "*Transmodern Manners*".

Then, I discuss some important topics raised by WASHIDA in this book, in contrast to my own contributions. One of the themes is 'machine.' WASHIDA deals with McLuhan's media theory as well as Foucault's theory of biopolitics to depict how the human body, implanted into producing machinery, becomes a corpse. The second theme is 'time'. Here, WASHIDA makes his practical debut as a philosophical theorist of mode. He clarifies the categorical imperative of mode which says that what is in mode is what should be in mode. There he sees the utter 'groundlessness' characteristic to our modern society and the game we seem to play eternally.

「キーワード」
鷲田清一、近代、トランスモダン、無根拠、モード